

# 本当は 怖い友情

(または『自分以外の誰かはどうやって心の内側に折り合いをつけたか、若しくはつけようとしているのか最早していないのか、或いはつけようとして失敗しているのか等の思考実験』、そうでなければ『文芸部×立国史』、はたまた『未だ名づけられない物語』、『永遠に名づけられない物語たち』、いっそのこと『無題』ってタイトルでも自分はいいいんだけどちょっとそんなのはここには書けないかなあ前もやったし)

(あっ横書きで適当にまとめた感じなのは他の皆さんと区別を付けるためなんで！ わざとなんで！ 本当だよ！！！)

(これは元々横書きの冊子としてサークル内で印刷し公開した作品を一部改筆したものです。)

著：@wanazawawww

まえがき。

自分の書いているものは群像劇なんだけど、話の趣旨が全く見えません。

だって、キャラクターが勝手に動き過ぎるんですもの。書きたいものを書きたいようにしか書いてないんですもの。作者自身そういえば趣旨など全く解って（作って）いないのだという事にたった今突然気付いて驚愕しました。何かを伝えたいという気持ちで書いたわけでもないからなのですが。

なので今決めました。

自作の冒頭に毎回「なんちゃらのお話です」みたいなのを書くのを幸いとばかりに活用することにします。

暗い情念は何を引き起こすか全くわからないがそれによって誰かを救うことは果たして可能なのだろうか、というお話です。

(今回の本編より一年前の四月一日の夜：名を呼ばれない語  
られない問わず問われない青年から名を呼ばれる語られない  
問わず問われるべき少年へのメール)

まあ信じないと思うからエイプリルフールに言うんだけど。

実は俺は高校一年の夏～大学一年修了の三年半を繰り返して  
るのよね。今回でちょうど二十回目になるんだけど。ちょ  
っと人を傷付け過ぎたことに気が付いてベッドで毛布にくる  
まって泣いてたら、いつの間にか高校一年生の夏のある日の  
朝だったんです。

それから同じように何度も何度も何度も何度も何度も何度  
も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何  
度も何度も泣いてやり直してるんだよね。

でもさあ……何度やっても失敗するんだよ。何処かで人の  
心の舵を取りきれないんだ。——友人のだったり、自分のだ  
ったりするのだけどさ。

でもね、今回は特別上手くいった方なんだよ。誰も泣いて  
ないんだ。それどころか君みたいないい弟子……じゃない、  
後輩が出来たんだしね。お世辞言ってるんじゃないよ。

まあ、エイプリルフールなんだけど。

でも、恒ちゃん、覚えておいてほしいんだ。「実は本当なん  
だ」ってこと。俺は、「初代」さんはそう言ってたってこと。

明日は誕生日だよなあ恒ちゃん。先輩からろくなもん渡せ  
なくて悪いけどさ。

君を俺らの「存在しない魔法の国」の第二代皇帝に任命し  
ようと思います。

(某日文芸部室：言及し難い視点)

梶絆奈（くちなし・きずな）は、美人で格好良くて男口調で料理が下手で化学研究者として大学で働いてるけど実は可愛い詩とかイラストとか大好きでいい年して超乙女なお母さんと品良くおっとりしてて眼鏡で格好良くて優しくて専業主夫で料理が上手で何故かいつも敬語で奥さんと娘が愛しくて愛おしくて堪らないお父さんとに育てられました。この夫婦の馴れ初めや家族の日々だけで一作作れそうですがそれはまたの機会に。

高校に入って付き合いだした年上の彼氏はお父さんに似て優しかったから沢山甘えたかったけど、彼氏さんには友達がいっぱいいてその友達にも優しかったので焼きもちを妬いたりもしていました。自分の友人が特に可愛がられているのはそりゃもう殊更気に食いませんでしたのでよく二人が話しているのを邪魔したり友人につれない素振りを見せたりもしました。これはこれでスピンオフが書けそうですがまあ、これもまたの機会に。

彼氏さんにフラれた(と言っても現在もメールのやり取り

は続けていたりしますし、色々と言及すべきこと話したいこともあるのですが、いかんせん機会が無いのです)後は、夜中にぐずぐずに泣いたり誰彼構わずメールを送って心の隙間を埋めるのに腐心したり彼氏さんの弟子を卒業した友人に死ぬほど甘っちょろいことを言って怒られたり慰められたり慰みになったりしていました。

そして、そんなところへ現れたのが、

……

「……先輩。なんですか天井にあるこの、数学の記号連ねたみたいなの」

「え？ 君は気付いてなかったのか？」

「はい？」

「区切り線だよ区切り線。本文が始まる前と後についていて、これより前には話の全体のテーマを示すような言葉が書いてあるらしい……まあ作者がそう言ってたけど、どのくらいの的を得たことが書いてあるのかはぼくらには知る術も無いしな

あ。意味の通った言葉が書いてあるのかどうかも」

「あの、『これより前』って感覚が全然わかんないんですけど」

「あー……本を読んでも話が変わる時に何行か空いてるじゃないか。それで、小さいマークが付いていたりする」

「ああ、石田衣良の『池袋ウエストゲートパーク』とかだと話によって毎回違うアレですか」

「そうそう、伊坂幸太郎だと毎回の主人公を示すマークだったりするけど。要するにアレと同じようなものなんだと思うよ」

「んー……解ったような解んないような……まあいいや。で、その区切り線がなんで今回は僕にも見えるように？」

「さあ……大体地の文をやる時には何処かに見えるんだけど、今回は地の文の無い会話だけの話のはずだから、いつもの取って付けたようにカッコ書きで時制の書かれたのが床に転がってると思ってたんだけど」

「ええええそんなのありましたっけ!？」

「君が注意力散漫なだけだろ……まあなんだ、会話形式の時には下にあるらしいがそれはぼくも見ることがないな」

「ふうん……つくづく変な設定ですよーこの話。まだまだ僕

らの気付いてない設定とかあるんじゃないですかね」

「止めてくれよ怖いから考えないようにしてるんだよぼくは」

「だーって。そもそもめたねただって何の理由のないままいれこまれてますけどこれももしかしていつの間にか設定の根幹に喰い込んでたりとかしないですかねーまさか」

「少なくともついこの間まではそんなことはなかったよ……まあまあ、でも、いやまさかなあ」

「あと、なんで先輩だけ見えたんでしょうね。僕は先輩に言われて気付いてからだし」

「あー……読者視点として常識に近いキャラクターが選ばれたとか……」

「え、先輩は常識きやら粹なんですか」

「いや、自信ない」

「だと思った。先輩はそういえばいつから見えるようになったんですか」

「ん？ ……あー……君には当分教えないことにしてるんだ、悪いね」

「えー」「えーじゃないよ」「うーん」

(前章より半年前の一月上旬のある朝：名を呼ばれる語られない問われるべき少年と名を呼ばれる語られるべき問う少女との電話)

「……理由も話してくれないんですね」

「——うん、まだ、多分無理だ」

「どうして、ですか」

「ううん、多分信じてくれないだろうからね」

「じゃあ、絶対に信じるから、って言ったら」

「うーん。……言うだけ、言おうか」

「うん」

「例えば、ありがちな、誰か他に好きな人が出来たとか、そういうのじゃあないんだ」

「はい」

「それはまず、信じてくれる？」

「……それはそりゃ、信じますよ」

「そう。……君の事を嫌いになったり、好きじゃなくなったりしたわけでも、全然、ないんだよ？ ……ねえ、臆病なくらいに言いたいんだけど、」

「だから、——信じますってば」

「本当にかい？」

「くどいです」

「……そうだね」「はい」

「怒ってる？」「割と」

「……あのね、……」「はい」

「のっぺら坊になって、さ」「はい、……、は？」

「元々僕はきいちゃんや、そうでなくても他の誰にも、家族や親族の話をしなかつただろ？ しなかつたと思うんだけど、それは僕が意図的に話さなかつたわけじゃあないんだ。ただ、話す気に一度もならなかつただけなんだよ。それに、恐らく誰も訊く気にもならなかつたんだと思う。それもそのはずだ、僕には家族なんていなかったんだから。」

「」

「僕の家だって僕の友人は誰も知らなかつたし、教えた事もない。どんな学校に通っているのかも誰も知らない。それらは両方、僕も知らないんだ。君や他の友人たちと会った後何処へ帰っていたのかだって、解ってはいなかつた。実は帰る家なんてなかつたんだ。今思い返せば、君らに会った後の記

憶は僕には無い。僕は、誰かと会っている時以外は存在しなかったんだよ。」

「」

「それを、今朝気がついた。」

「」

「僕は、一体何なんだろう。僕は一体、」

「」

「……………とにかく、本当にそれに突然気がついたんだ。そして、鏡を見たら、——僕に顔が無かった」

「あの」

「うん」

「疲れているんでしょう」

「……………疲れてもいる」

「それ『も』わかりますけど」

「——疲れてるだけ、なのかなあ」

「病院にも一度行った方がいいです」

「そうかもね」

「はい。じゃあ、ぼくもちょっと、あの、悪いですけど」

「ごめん」「いえ、あはは」

「じゃあ、病院には行って来ることにするよ」

「はい。お大事に、また週末に」

「うん」

「……………ああ、でも」

「うん？」

「信じるとは、言ったから。もしよければのっぺら坊の画像を送って下さいよ」

「え、……………いやあ、疲れた顔を見せるのはちょっと」

「見たいんです」「あ、」

「送ってください、送って」

「……………そうだね。じゃあ、」

「はい」

「信じてくれた時のために言っておくけど。……………ずっと好きだよ、きいちゃん」

「——ぼくもですよ。恒ちゃん先輩」

「うん、……………じゃあ、一旦切るね。写メ送ったらちょっとそのまま用事があるから、電話はかけられないと思う。ごめんね」

「あ、はい、解りました。……………それじゃ、信じた時のために」

言いますけど」

「うん？」

「……また、会いましょう」

「……うん」

(九月二十日、某所駅前のお茶店：名を呼ばれる語られ語る  
問わず問われない少女の記述)

「先輩可愛い(白髪しろかみもしやもしやツインテール、お茶店のテ  
ーブルに頭を置いて雨降る窓を見つぽそり)」

「うむ、きいちゃんは可愛い(黒髪くろかみもしやもしやロングヘア、  
白髪の対面の椅子に浅く座り腕を組んで)」

「ですよ(白髪、同じ姿勢のまま頷く)」

「だよ(黒髪、続いて鷹揚に頷く)」

「うなじとか(白髪、恐らく少し紅い目を輝かせて)」

「からの一肩とか。はだけた肩たまんないよかじりたくなる  
よ、歯形つけてると一層えろいよ(黒髪、やや顎を引いて。  
ハンチング帽を被っているため周囲の客からは顔の上半分が  
隠れる形になる)」

「……髪とか(白、先ほどより低いトーン)」

「シャワー前の匂いとかね。つむじに鼻当ててくくんすると  
と皮脂のこう、なんていうの、香ばしいような匂いがさ…へ  
へへ……。シャンプーの匂いもいいけどねー綺麗で(黒、や  
や口元にやけさせつつ)」

「……足、とか(白、やや生気の薄い声で)」

「うちももの曲線とか？奥の方ほくろあるよね。ちょっと押  
し広げてやるとホント白くってむちむちっていかぶりぶり  
っていかうお思い出だけで鉄の臭いが(黒、少しづつ  
首をそらせながら語る)」

「……………背中(白、ほぼ死んだ声で)」

「文句なしだね！布団にくるまってちょっと猫背になってて  
背骨ごりごり見えるのとかまじしやれならんしょ！あとあば  
らとか。うなじ→肩→背中→おしりが露わになり最強に見える  
(黒、拳を握り)」

「……………まあ、性格……(白、死人)」

「うわー無いわーあんな面倒くさい性格好きとか無いわー引  
くわー。そりゃ殆どマゾヒストって言うのよ、寄ったら嫌が  
り離れたら寂しがり他所行ったら妬くくせに大抵追う度胸は  
無い、女のくせに女々しいというか何と言うかあたしもよく  
腰に首に絡まれたりなんたり果ては恒ちゃん先輩いなくてこ  
の上お前までいないんじゃ死ぬしかないじゃんかあとかなん  
やらかんやらわけわかんない恨み言吐きながらわんわん泣き  
出したりできあ別れる前の彼氏かよっての、いやあたしは男

と付き合った事無いけど（黒、一層に楽しそうに）」

「ねえ風澤さんほんと先輩の何なんですか！（白、跳ね起き立ち上がりながら声を高めて）」

「――彼女。元ね（黒、『風澤さん』、あたし、集まる客の視線を意識しつつ一拍置いて無視しながら）」

∴∴∴∴∴∴∴∴∴∴

某所駅前のお茶店で白髪の女の子がテーブルに横向きに頭を置き雨降る窓の外を見て、「あ、やっぱり見えるもんですね」、と呟いたと見えた。

あたしはその向かい側に座っていたので「ねえ、君の目は一体何処に何が見えてるの」と問いかけると、前に座った白い頭は人間の女の子らしい声で、区切り線ですよ、と応えた。

「数学の記号みたいな、はにわが上向してるんだか下向してるんだかして並んでるみたいな、なんかそんなマークが一杯ついてる、銀色の丸いパイプみたいな…」

「なにそれゆーふぉー？葉巻型？」

「だから区切り線ですってば。あれより前には会話文があったり説明文があったり短文があったりするんじゃないかって絆奈先輩が言ってました。よく解んないけど」

「前に？ 会話文？ ちょっと待って待って、まだ言ってること掴めて無い……っていうか何処にあんのされん君、その区切り線っての」

「ああ、ほら、窓の外に――あ、遠ざかってく」

白い指が雨の降る店外を指したけれど、あたしには何も見えない。

「……まあ、あたしの知らない世界だってあるよね」とお茶を濁すような事を言うと、赤いカチューシャの映える丸い白髪頭はまったくですなあ、誰だってそうですとむしろ自嘲げに呟きながら、ゆさゆさと揺れた。

多分サ店で女二人がクダ巻いてるみたいに端からは見えるんだと思うんだけど、実のところはあたしの前にいる白髪赤目でもしゃもしゃツインテール（ちょっとパーマメントした長い髪を頭の両側で結んだ髪型ってことで――まあパーマとは言いつつこの子のこれは人工とも天然とも言い難いのだけ

れど、)で白いブラウスに焦げ茶のジャンパースカートの女の子……に見える彼は、名前を兎津崎恋仁(うつさき・れんじん)と言うれっきとした男の子である。通称れん君、高校一年生。

叙述トリックってなやつで一応はミスリードなどしてみたのだけど如何だったかしらん、文芸部員のきいちゃん(れん君の恋先であたしの親友、先の会話の議題として語られた)やれん君や仮にも歌と詩で物喰ってるすーちゃん(あたしの親友。今回は名も呼ばれず語られもしない)らと違ってあたしは文章なんてここんとこずっとメールとブログとついったくらいでしか書いてないし、細かい技法なんかは読んだことはあっても使った事はないからもしかして読んでる人にはあたしの魂胆なんぞばればれのヨミヨミだったのかもしれない。

あ、因みにこの文章は文芸部員になんか書けと言われて書いているんであって別に好きで書いているわけじゃないんだからねってアレなんだけど、も一つ因みに言うならばあたしにそれを依頼(命令かな)したきいちゃん——梶絆奈(くちなし・きずな)。文芸部平部員の二年生。あたしの元彼、女の子だけど——の年下の上司が目の前にいらっしゃってぐだっしゃってるたった今、ガラケーの方で実況レポート形式で書い

ております。

忙しいとこ突然頼まれた腹いせって一なわけじゃないのだけれど、こんな風に部員を見たまんまレポートのものを提出してしまえというコンセプトで書いてます。

まあね。どうせ出来上がって提出したらすぐにごみ箱の中に叩き込まれるんだらうけどね。

そんなこと書くから。

……ん、名乗り忘れていた気が。

あたしの名前は風澤一(なぎさわ・はじめ)。「存在しない魔法の国」の第三代皇帝です。以降お見知りおきを。

……

「……あっそうそう」

「ん？」れん君がびよこんと起き上がって人差し指を天に指したのであたしも頬杖した手から顔が浮く。っていうかなによそのジェスチャーなかなか見ないよ。

「なんで風澤さん呼んだのか忘れるところでした」そういう



「じゃないんですよ！ 一応！！（れん君絶叫、今度は立ち上がらない）」

「自覚はあるのかよ（苦笑あたし）（↑うわっなんかチャットみたいきもい……）」

「ありますけれども！ ……じゃねーの！（テーブルれん君びしばし）とーにか、く（置いといて、のジェスチャー）、これからどうやったら先輩をですね、」

「ちょいちょいちょい（右手を上下させてボリュームダウンの指示）」

「はい？ ……（れん君気付く、見まわす、視線を気にする） ……ああ、はい（肩を縮めてなんやらへこへこしながら改めて深く座る）」

「うん。で？（話を促すあたし）」

「うん……それで、まあ（れん君コーヒーカップにぷるぷるの唇をつけて）どうにかしたいなーって……ん（少し飲む）」

「（角砂糖を入れてかき混ぜながらのあたし）まあねえ……と はいえまあ、（因みに猫舌なのでもう少し待つ）」

「……ん（れん君、カップをお皿に置いてまたリュックサックを取り出し膝上にごさごそ） えーとー」

「ん？（訝しむあたし）」

「えーえーえー……（まだがさごそ） …… あーこれこれー（謎の紫のピンを取り出し）」

「んんん？（まだ訝しいあたし、いやでももう気付いてはいるけど）」

「えーへーへー、自分用のよくわかんないものを持って来たんでー。ぶどうジャム持ち込みー（れん君、得意げ）」

「あー。 ……早めに入れてしまおうな、持ち込み大丈夫かわかんないじゃん（店員がいないか見まわすあたし）」

「あーはーい（れん君ピンをくるくる、ぎゅぽ）。 ……あ、風澤さん何か言いかけてた気が（いつの間にか出したスプーンを右に持って）」

「ん？ あー……（顎に手をやる） えーと。 まあほら、脈が無いわけじゃなさそうじゃない、現状」

「あー……あ？（れん君ぶどうジャムをぶち込んだ手のまま） ……そんなまた、またまたそんな（左手ぶんぶんして否定）」

「あ、そんな感じの認識なんだ。 ……んんんん。 あれはね、今のうちにもうちちょっと押していいよれん君（にやにやあたし）」



(前章より半年前の一月上旬のある朝：名を呼ばれる語られ語る問わず問われない少女の記述)

電話。

「……え。で、つまり、」

「うん。三代目ははじめに任せようと思ってるんだけど」

「えええええあのえっちょ、別にいいじゃないですかのっぺら坊でも異形頭って素敵じゃないですかきいちゃんそういうの好きですしあたしも大好きですけど」

「いやあのね、もうきいちゃんには伝えちゃっててさ」

「えっちょっともしかして」

「ううん別れたわけじゃないの、ちょっと暫く会えなくなるよーみたいなことをさ」

「暫くって先生無期限って言ってたじゃないですか！ ひっでひっで、のっぺら坊は信じてても先生の事は信じらんなくなりますよそれ説明を求めたいんですけど?!」

「うーんとなー、話すと長いんだよー」

「いや長くていいンで。あたし長い話聞くの好きですよー先

生は話面白いからもっと好きですんで話して下さいよーねえ」

「うーん……あー、もしかしてはじめなら、『××××××××××××』って聞いたことあるかな」

「……えっ、」

「ある？ やっぱりなあそうだろうとは思ってたんだ、なら話は早いんだけど」

「いやいやいや早くないです、むしろ先生がなんでその名前で、っていうかやだなあそれはフィクションで」

「フィクションではこんな名前では呼ばれてないよ。知ってるでしょ」

「……はい、じゃあ、つまり」

「うん。僕はあれの一つらしいんだ」

「……………いやいやいや、確かに少し色黒けども」

「うん」「でも目は黒いし二つしかないし」「それはもう無くなっちゃったからわからないなあ」「ほらほらほらわかんない

じゃないですかー」「でもものっぺら坊だしなあ」「……カオナシ……」「おいしい、でも変換すればどんぴしゃ」「あれって元

ネタあれなんじゃないかなって思ってるんですよねあたし」

「らしいねー」「あれっていうかあなたっていうか」「だねー」



.....

……どうせゴミ箱行きだから書くんだけどね。

(九月末某日放課後の文芸部室：名を呼ばれる語るべき語られるべき問うべき少女の視点)

部長君が髪形を変えた。

……とは言っても彼が髪形を変えるのは実は日常茶飯事で、今年の初夏にぼくが言及したツインテールだって竹食った三日後くらいには活発そうで可愛らしいボブになっていたし、それから平均一、二週間の周期で移り変わり昨日まではお尻までの一本三つ編みだったのだから驚くことでも何でもないのだけれど、まあ何のことは無い。遅筆の作者を持つシリーズ物のメイン地の文キャラとして久々に読者諸君に近況報告でもしようと思立ったのにそんなときに限って特に書くことが無いのでとりあえず部長君の髪についてから語ろうと考えた程度のことなのだ。

それでその問題(実際は無問題だが)の部長君の新しい髪形なのだけど、今回はふくらはぎまでぐっと伸ばして緩くパーマをかけ両耳の上辺りを赤い紐で縛ったもこもこツインテールである。これがまたなかなかぼく好みでよろしい。これが

白髪なのでまるで羊のようだが、それでも彼もまた世界の大半の男がそうであるという羊の顔した狼なのだろうかなんてしょうもない事をふと考えてみる。

んー、だとしたら一番最初に狙われるのはやっぱりぼくか。とすると二人きりになればそこいらの地面に押し倒されたり…無いか。部長君と出逢ってからもう九ヶ月、これまでも幾度となく二人で時間を過ごして解ったのは、今文芸部室でセーラー服の紺色スカートと赤いスカーフをぱたぱたはためかせ、もこ白髪を窓からの秋めく風になびかせてうひゃーとかんふふふとか言いながら喜んでいるおとこのこ(漢字変換については諸説あろう)は「のこ」を落っことすとただのヘタレでしょっばい「男」であるということだ。だってただのどっかい猫にもびびるし。暗いところ怖いし。高いところ苦手だし。

とすると、今ぼくが彼と二人きりだからといって何かを奪われるというようなことは無いか。その辺は少しデリケートな話に……というか、かなりいろんな所に触れる気がする。

……あ、ところで部長君の髪伸びるスピードについての突っ込みはしても面白くないです。どうやらぼく以外の周囲の人間は誰もあんまり深く考えてないらしくて、部長君に訊



芸部が誕生したのであった。

これが、今までのおおまかなあらすじである。

……ふう。あまりにも取り急ぎな説明をしてしまったが、大体わかっていただけたらうか。

補足するように説明を入れさせて貰うと、右記（作者はメモ帳で下書きする派らしいので『現段階』では「上記」、だが）に書かれている「赤目白髪女装男子の一年生変態部長」というのが一番最初に名前を出した部長君、「男装系サブカル残念女子の二年生平部員」というのが「絆奈先輩」と呼ばれているぼくのこと、である。

因みにぼくが部長君こと兎津崎恋仁（うつさき・れんじん）君を「部長君」と呼ぶのは、可愛い年下の男の子でありながら彼が意外にも部の長及び編集長としてはなかなか敏腕であることに敬意を表しつつも、  
「やっばし年下だしなあ」  
「あからさまにへたれだもんなあ」

……という感情もまた、全く捨てきれないことからきている。へたれっぷりは前述の通り。

彼の容姿の描写をもう一度すると、まずは純白の髪、深紅の瞳を最初に挙げるべきだろう。アルビノと呼ばれたりする一つの先天性の特徴らしいが、ただし彼のアルビノはただの色素欠乏でなく父方の遺伝で、ずーっとそういう家系なのだそう（そういえばアルビノは陽の光が当たってはいけないんじゃないかな…少なくとも部長君がそれを気にしたことは無かった気がする）。平安時代まで遡ると蠱毒とかやっていた危ないほうの陰陽師にたどり着くらしいんですよーこの髪もその頃に魔物と契約かなんかしたからこんなに白いんですってーとは兎津崎家末裔たる本人の言だが、本人も眉つばで話していたようだし伝えたのがもしあの親御さんなら信じる方がおかしい。

更に、部長君が父方から受け継いだものとしては他にその女性的な美貌がある。ぼくより薄い眉、ぼくより大きい瞳、ぼくより低い身長。彼は小顔丸顔くりくり目ん玉の可愛い系だが、一度あったことのあるお兄さんは少し切れ長の目の美人系、写真でしか見たことは無いがお父様は面長な妙齢の美

女であった（男だけど）。

……あと余談ながら、敢えて隠喩的な表現を使うが。みなさん、鼻は高いが「小ぶり」であるらしい。

お察し下さい。

ん。ぼくの自己紹介が求められている気がするが。一人称小説だからぼくの説明は特に要らないだろう。おいおい輪郭だけでも描写される事だろうと思うし、描写されなければ、……もう作者のサイトでも覗くしかないだろう。なにせこれまで近頃新しい話と言えばザーっと内輪に解ればいいさーというような書き方をしていたものだから結局表現が曖昧で分からなかった、というようなことも、幾らでもありうる。当然避けられるべきだが至らない部分はどうかそちらで補完してもらいたい。

……何？ 要る？

……梶絆奈（くちなし・きずな）、高校二年生。半ヘテロ。髪は茶で背中まで。赤眼鏡。以上。

∴∴∴∴∴∴∴∴∴∴∴∴∴∴

ひとしきりぼんやりした後で、ケータイを弄るぼくに部長君が振り向いて声を投げた。

「……九月末となると、もうじわじわと秋ですねー」

「まあねえ」答えながら、陽光に照らされる白髪に少し見とれる。

「先輩は今月は何か予定あります？ 僕はないんですけど。なんか理由もなく何処かに行く予定を立てておきたいような気分なんですよね」

「……へえ」——おいおい。「まあ日にちにもよると思うけど」

「ですよねーえっへへー。まあ予定が決まったら教えて下さいねー」

「ああ……にしても」「はい？」じゃあ、鎌でもかけるか。

「……いや、なんでもないけど。デートのお誘いなんて出来たんだな君」

「……………まあ、ちょっと、心境の変化が」と答える

「ふーん。はじめに焚きつけられたとかそんなんじゃないんなら別に気にしないけど」

「」

「鍵かっこ出したらなんか喋れよ……」ちえっ、「やっぱりそうか」

「うわああんごめんなさいそんな冷たい目いやあああああああ」

「冷たくなければいっそフォーマルハウトから特別熱いのも持ってくる勢いだ、今が夕方君は命拾いした」

「うわあう……うわああ……」おお、言えば言うほど縮こまるの面白い。

「いやまあいいよ、しかし君単体というよりむしろはじめに文句を言った方がいいのかなあ」

「えっえっ、いやあのそれも、」

「今は冗談だよ」

「今はですか」「今はね」「今かあ……」

しかし、そうか、僕は、

舌打ちをするのか。

……ふうん。

ずるいなあ。

「……まあいいや、今のところは」

それなら、それで。

でも、本当に？

あとがき。

自分の書いているものは群像劇なんだけど、話の趣旨が全く見えません。

だって、キャラクターが勝手に動き過ぎるんですもの。書きたいものを書きたいようにしか書いてないんですもの。作者自身そういえば趣旨など全く解って（作って）いないのだという事に書き始めて突然気付いて驚愕しました。何かを伝えたいという気持ちで書いたわけでもないからなのですが。

なので冒頭で決めましたね。

自作の冒頭に毎回「なんちゃらのお話です」みたいなのを書くのを幸いと活用することにしました。

暗い情念は何を引き起こすか全くわからないがそれによって誰かを救うことは果たして可能なのだろうか、というお話でした。

まあそれは置いておいて、ですね。

今回のこれを読んで印象の変わりそうなキャラが二、三人います。よね多分。

いいんですけど。

それなら、それで。

でも本当に？

(たった今裏表紙で：あなたが見てます)

「……なんでこんな所に出されたんだろう……」

「え？ 何か適当に話せ？ 止めろよそういうアドリブ嫌いなんだよ。」

「えっちょ、何処へ行くんだ、っていうかどっちへ行ってるんだそっちはっていうか、え、

「……なんか話すことにする。」

「気が狂ったが故に『第四の壁』をぶち破ってしまったキャラクターというのがたまにいるらしいじゃないか。ぼくは詳しくないけど。まあぼくもああいうのの内に入るんだろうか。でもあれは大抵作中人物からは『気が狂っているから訳のわからない事を言っているのだ』って扱いになるらしいな。……あー、ぼくも正しくSAN値を削り取られてこうなったんだからそういうことなのかな……」

「……閑話休題。」

「……えーと、先に話しておく。今回のこれについて以前の読者の皆様にとっては嬉しかったりキツかったりするものかもしれない。っていうのも、これまで人間関係の説明

をこの本の中でかなりの部分やってるんだよな。説明されてこなかった部分とか。らしい。ぼくだけの視点じゃないようだからぼく以外の誰が何を話してるのか解らないけど。

「しかしこういう書き方をして前からの読者は喜ぶのか。喜んでるのか？ 敷居はどうせ高くなってるからもうガンガン上げるよ。新しい読者の皆さんはこの裏表紙より先に内側から読んでほしい……欲しかった。もう無理か。」

「因みに新しい読者さん向けにちゃんとキャラクターや設定の簡単な説明はしてある（っていうかぼくがした）からそこまで身を固めなくてもいい、と思う。あつてもあんまり解りやすい書き方はしなかったかな……そんなに入り組んでないから大丈夫だと、思う。よ。」

「……不安だな。この本で話を読まなくてもいいよ、『悪食屋本舗』でweb検索したら作者のサイトに辿り着くからそっちで読んだ方がまだ違和感が無いかもしれない。」

「……おい、おい、おい、まさか、こんなところで宣伝をするためだけにぼくはここに呼ばれたんじゃないだろうな……？」

「――もう終わりか。じゃ、本編も宜しくとはっておくよ」